

成吉思汗の挽歌に就て

文學士 鴛 淵 一

挽歌とは云ふ迄もなく、人の死後其柩を、墓地に運ぶ時などに、車を曳きつつ歌ふ歌詞をいふのである。或は單に哀悼の意を表はし、其生前の事どもを偲んでよむ詩歌をいふ事もある。かかる事は、人の常として何處にもみられるものであつて

日本でも「たまよばひ」などと、昔から云つて居るのは、即ちこれに當るものと思ふ。今他國の事は暫く措いて、蒙古人に就いてみるのに、蒙古の風習としてかゝる歌をうたふ事は、何人にもある事であると思ふが、其記録に見えて居るのは、僅

かに成吉思汗一人であつて、他の可汗等には少しも見えず、又一般人民にも、其事が記されて居ないのを見れば、その成吉思汗の挽歌なるものは、記録として餘程珍らしいもので、研究の價値は大にあると思ふのである。

初め、私は或事を調べんが爲に、漢譯の蒙古源流をみ、之と喀喇沁王府所藏の異本源流とを比較したのであつたが、その時、所々に異同ある事を見出したのである。そこでこんな調子では、その全部に互つて比較する時は、意外な異同を發見し

はせぬかと考へたが、全部に及ぶ事は、僅かの間には困難であるので、内藤博士の御注意により、その極めて一小部分の挽歌の所だけを、特に比べてみ、且之を日本文に譯さうといふ氣を起したのであつた。頭韻をふんで、語調よく出來て居る蒙古の歌詞、それを日本語に譯す時は、どんなものになるだらうかといふ事は、私に少なからぬ興味を起したが、歌謠の性質に疎い私には、その譯を歌らしくする事は出來ないので、實際に譯す場合には、唯の譯文とするより外に致し方なかつたのである。固より淺學の致す所、その譯文も不十分であるが、分つた所だけを此に起し、足らぬ所は諸彦の教を仰ぎたいと思ふ。然して、此には歌だけに就いて考を述べ、之に關係する蒙古の葬送の風習等に關する興味ある事は、省く事にしたのは、豫め寛恕を仰ぐ所である。

尙又此挽歌の記されて居るのは、唯蒙古源流だ

けであつて、他の書には少しも見えない。其蒙古源流も、今迄の漢譯本と、其原本である蒙文の本(奉天に在り内藤博士はそれを青寫真にうつして有つて居られる)及その原本と同一と思はれるものに有名なシュミットが獨逸語で譯注を附して出版したものと、數年前滿鐵を介して手に入れる事の出來た喀喇沁王府所藏の異本源流とがあるのである。此四種以外に、まだ異本があるかも知れぬが、今は此によつて比較する事にした。

私は初め漢譯本と異本源流とを比較した時、可成異同があり、意味の解し難い所もあつたので、後之を原本の蒙文のものに比較して見た所、其異本には抄略された句が三四ある事が分つたのである。之は前後の關係よりして、全然別種なものでなく、恐く同種のもので、唯原本より轉寫する際に脱略されて、異同を生じたものと考へられる。然し三四句を缺いては、その意味の通じない事が

多く、單に換歌の所だけで、こんな有様では、全體に於ては、餘程の差違があると思はれるのであつて、異本は餘り信用されないような氣もするのであつた。そして最後に之を邦譯する際には、參考として、シユミット本をみた所、原文と少しかけはなれた譯の部分を見出したのである。それで次に此等の點に付いて分つた所だけを附記して、此挽歌を譯してみる事にする。

次に歌の譯文を記す前に、此挽歌の體裁を一言したいと思ふ。此體裁に付いて考ふる時、我々が非常な興味を起す事がある。それは、即ち、この歌が韻をふんで居るといふ事である、殊にそれが頭韻をふんで居る事は、著しい事であると思ふ。固より、此韻をふむといふ事は、獨り此挽歌や蒙古の歌のみに限らずして、世界の諸民族の歌にも共通の事であるが、蒙古の歌にはその性質がはつ

きりして居るように思はれる。而して蒙古に於ては、歌のみでなく、更に古き物語等にもこの韻をふむ事をみるのであつて、かの有名な元朝秘史には明かに此がみられる。之は口を以て語りつき、言ひつぐに都合よい爲である事は、云ふ迄もなく又それが爲に、自ら短い句をなし、歌に近い句となつたものであらうと思ふ。那珂博士はその不朽の名著成吉思汗實錄即ち元朝秘史の譯文の序文に次の如く言つて居られる。(一)

蒙古文の甚だ奇異にして甚だ面白きは韻文多き事なり
その韻文は、皆巧みに頭韻を排べたるものにして、漢文には固よりその法なく、同じ語族なる我國語にもその例希なり。……毎句の頭又は毎語の頭と同じ成音をきて語調を面白くするなり。この語調は、日本語にては談話の辭に最も適して聞ゆれき、蒙古語にては、格言、古諺より喜怒哀樂の情を抒ぶる辭、教訓詰責悔謝の辭に至る迄、皆此韻文を用ふ。その中には、物語を傳へたる人の作れる文句も多かるべけれども、元來

蒙古語にかゝる流行ありし故に、作れる人も作れるな

るべし。然らばかゝる文章特殊の修辭を加へたる言語

は、蒙古人の文字を知らざりし時より行はれたるなり

……頭韻ある文は、對句より成り、短きは二句、長

きは二節、或は二段なれども、稀には三句、又は三節

にして、三韻を用ふる事あり。又極めて稀には、十句

もありて、韻も屢換へて對句を成さざるもあり。云々。

之は歌謠そのものに就いてといふよりは、寧ろ通

例の文に就いて云はれた事であるが、其語りつぐ

爲に自ら句を切り、語調よくせん爲になされたも

のであつてみれば、それが歌ともなれば、一層明

白に韻をふむ(戴くといふべきか)事は、云ふ迄も

ない事である。

然らば、今次に述べようとする成吉思汗の挽歌

は如何なる體裁になり、如何に韻をふんで居るか

といふに、次の如くである。即ち二段十一節四十

二句より成り立つて居るのであつて、毎節の句數

及頭韻は次に記す通りである。

第一段 二節八句。

第一節 四句 頭韻 ha(異本は缺けて三句ミなる)

第二節 四句 同 ji

第二段 九節三十四句。

第一節 二句 頭韻 hú

第二節 四句 同 tú

第三節 四句 同 a

第四節 四句 同 o

第五節 四句 同 hē

第六節 四句 同 bú(異本は缺けて三句ミなる)

第七節 四句 同 ho

第八節 四句 同 ha

第九節 四句 同 ha(異本は缺けて二句ミなる)

右の如く、一節は主として四句よりなり、唯一節

だけ二句より成つて居る。私は初め異本源流をみ

た時に一節三句としか數へられぬものが有つたの

で、三句も亦常例かと思つたのであつたが、後原

本をみるに及んで、その脱句有るを知り四句が正例である事が分つたのであつた。節は右の如くであるが、その一句の長さは一定せず、言葉の數亦不同である。それは別に樂器に合はして音律をどのへて歌ふといふのでないから、その必要がないのであると思ふ。此毎節が、同じ頭韻をふむ句から成り立つて居る事は、右に記したローマ字音の通りであつて、一節中にて決して混同する事はない、之が蒙古の歌の特色なのである。それと共に第二段の第二句から第七句迄は句の終りが何れも Chinu (汝) の義人稱代名詞第二人稱所有格) で結ばれて居るのも、やはり一種の韻をふんだもので、頭韻に對して脚韻として語調をよくするものであると思ふ。それが右の十一節全部に互つて居ないのは、内容上から來た爲でもあり、又脚韻が必然的のものでない爲でもあらうが、とも角頭韻に對して脚韻とみるべきものが存するのは、注意すべ

き事である。尙此に第一段第二段と云つたのは、私の便宜上の事であつて、初め衆人等歩行して哭いて柩を送る時、蘇尼特部の吉魯根巴圖爾が哭いて、初めの八句を言つた所、車が穆納の地に至つて俄に動かなくなつたので、吉魯根巴圖爾は、再び第二段の句を云つたら、車が動いたといふので假りに前後の第一第二に分けたのであるが、勿論意味に於ては連絡して居るのである。

然らば、その歌は何を云つて居るのであるか。次に邦語に譯出してみよう。蒙文の漢譯と、シュミットの獨文譯とを比べれば、少しづつ異つて居る所があり、漢譯には意味の不明な句もあり、獨文譯には餘りに意譯に過ぎて原文と一致しない所もある、又原文自身にも解しかねる句が一二あるが、此には原文から直接邦語に譯し、それと他の譯文とを比べて特に異つて譯して居る點を、附け加へる事にする。

(1) 第一段第一節 四句。

空翅ける鷹の如く飛び去れるか我主よ。

軋れる車の輪となりて行けるか我主よ。

汝は汝の夫人と子供を眞に残したりや我主よ。

汝は汝の集めし族人を此に捨て去りしや我主よ。

此第二句を漢譯には、

「我君豈以此輩汚穢而昇避乎」とし。

獨逸譯には、

「今軋れる車は汝を運ばねばならぬ」として居るが、何れも原文を少しはなれて居るように思はれる。元來此一節は二句宛の對句となるのであるから、漢譯獨譯は尙一考を要すると思ふ。

(2) 第一段第二節 四句。

欣々として輪を描いて超る鷹の如く、汝は彼所より來り我主よ。

何處にもあてなくて飛ぶ草の如く、汝は飛び行くか我主よ。

六十六年の汝が生涯の終りに汝が九色の民に。

喜びを安息を與へて今彼等よりはなれ行くよ、我主よ。

此第二句を譯してシユミットは、

「未熟なる駒の如く汝は没落せるよ我主よ」と云つて居る。原文とは全く異なるも、その意味に於ては同じ事と思ふ。思ふに彼が意譯しすぎて、かかる句を用ゐたものであるまいか。要するに「來る時は熟の羽擴げて空を打つ如く勢よく、去る時は草のとぶ如く、或は小馬の地に倒る如く、果敢なくなつた」事を云つたものでないかと思ふ。固より興亡生死を形容したに外ならぬ。

此に「九色の民」といふのは、蒙古族及成吉思汗に征服されて蒙古族の中に入つた他の凡ての部族を總稱したものと思ふ。此九といふ數は蒙古人のみならずトルコ族にも尙ばれた數で、目出度い數を意味する。祕史に「九の脚ある白藤を立てて罕の名を奉る」とか、源流の「九烏爾魯克（九猛

將、親軍九隊)「とかいふ九も、明白な數量でなく、立派な大きい數の義であると思ふ。故に此歌の九も同様で、全蒙古部族を指すものと思はれる。六十六年の生涯云々は、元史、源流等に見ゆる如く、成吉思汗の死せる時の齡である。

此二節を歌つて、樞車は穆納の地まで行つた所、俄かに動かなくなつたので、吉爾根巴圖爾は、再び次の句を云つたのである。

(3) 第二段第一節 二句。

かの永遠に青き天より、奇しくも生れ出でたる人間の獅子(王ミいふ事)なる天子、我聖王よ。

汝は汝の大部なる民をすて、獨り死出の旅路へミより行けるか、我聖王よ。

此節のみ、少し長い句の二つより成つて居る。大部の蒙古族に別れて、去り行く人を惜み悲しむと共に、之を慕ふ情がよく出て居ると思ふ。又、天を尙ぶ蒙古人の觀念も、伺はれ成吉思汗を尊ん

だ事をよく知るのである。

(4) 第二段第二節 四句。

因縁あつて相會へる汝の夫人。

平和に設立せる汝の國家。

道理を定めたる汝の政治。

萬々に集れる汝の國つ民。——凡て彼所に在り。

此には別に注意すべき事はない。要するに成吉思汗の一生をかへりみ、其功業を偲んだものである。唯此に云ひたいのは此初句の前に「前世に」といふ一語があるが、之は頭韻からすれば次の三句と合はないので、譯する時に略した事と、第三句をシユミットは「堅く基礎を置ける云々」とした事及末句に「凡て彼所にあり」と云つて句を切り、聽く人をして、より重くひやかした事等であるが、別に疑義はないと思ふ。

(5) 第二段第三節 四句。

汝の親愛せる夫人等よ。

汝の黄金の宮居よ。

美はしくも治めつる汝の國家よ。

汝の集めにし國つ民よ。——凡て彼所にあり。

これ亦功業の追憶一生の回顧である。第一句な
んかなかく面白くと思ふ。

(6) 第二段第四節 四句。

汝の生誕の地沐浴せる水。

汝の育てあけし蒙古人等。

汝の彫しき貴族大名役人等。⁽⁵⁾

幹難の「特里袞布勒達克」なる汝の生誕の地——凡て
彼所に在り。

成吉思汗の誕生地は Deligun Buldak で秘史には
迭里温孛勒荅黑、源流には特里袞布勒達克、親征
録には迭里温盤陀山等とみえて居る。Oion(幹難)
川の右岸に在り肯特山脈の高峰にあたること云はれ
る。今日も尙その同名の地ありといふ。因みに孛
勒^⑤黑は孤山の義である。此節に二度生誕の地と
云つて居るが之は特別の意味があるのでなから

うと思ふ。

(7) 第二段第五節 四句。

棗色の種馬の尾より作れる神位。

汝の大鼓鐃鉢喇叭笛。

凡ての名の付け得べきものを集めたる金の宮居。

アルラツドの皇帝の位に即けるケルレンの草地——凡
て彼所に在り。

第三句は凡ゆるもの有りど有るものを の義で
ある。第一句の神位と漢譯に見えるのは、蒙古語
setide の譯であるが、何と譯すべきか適譯を見付
けぬので、漢譯に従つてをいた。若し神位と云へ
ば、神壇とか、位牌と云つたものになるが、馬の
尾より作るといふのは、頗る合はぬ話である。シ
ユミットは之を「野戰に使用する徽號」といふ風
に譯して、旗等の義にあてて居るように見えるが
はつきり分らぬ。然し最近の「ワストーク」に出
たバルトールド氏 (Barthold) のウラヂミルツオウ

氏(B. J. Vladimirtsov) 著成吉思汗傳の評によれば

「süide」は白旗の事で、惡神に對して善神が有つて戰ふものといふ事であつて、サムツアラノ氏

(Zantsarano) 氏の言によれば、其白旗はロシア宮

廷に藏められて居る云々」といふ事であるとの由を聞いたのである。果して然らば、祕史その他の

記録に、成吉思汗の即位式の時に、九つの脚ある

白き藁とか九旂の白旗を立てたといふ藁に關係あ

るものでないかとも思はれる。洪鈞が「白き馬の

尾九つを旄藁とせるにて旗に非ず」といふは那珂

博士の説の如く正しいものであれば(7)サムツアラノ

氏が白旗といふのは、如何かとも思はれるが、藁

と云ひ、旗と云ひ、その名と構造の點から云へば

皆關係あるらしく、süideを藁とみるのは當を得た

ものかとも思ふ。唯一は白といひ、一は聚色とい

ふので、同一のものとは思はれぬが、ともかく馬

の尾で作つた藁を süide と呼んだ事は疑ないかと

思ふ。暫く此説を記して後考を俟つ次第である。

次にアルラッドの皇帝云々の義も十分に分らぬ。「アルラッドの皇帝」といふのか、或はアル

ラッドといふ地名、又は部名のようなものか。成

吉思汗の四傑の一人である孛斡兒出は、阿魯剌惕氏の人で、成吉思汗の即位の時に、大に働いた

のであるから、何か之と關係ある語かとも思はれるが確かでない。暫く疑問に附して置く。

ケルレンの草地といふのは、即ち成吉思汗の二

度の即位の中の、前の時の即位の地をいふもので

ある。元朝祕史卷三に、「其所より起ちて古喇勒古

山の内なる桑古兒小河の合喇主曠堅の闊々納兀兒

に下馬せり」として此所で各部の者が特穆津を推

戴して可汗とした事を起して居る。(8)此桑古兒小河

といふのは、不兒罕嶽の前に在るもので、即ちケ

ルレン上流の北郊の草地であり、初め成吉思汗が

秦赤兀惕に捕へられ、鎖兒罕失喇の計ひにより辛

うじて逃れし時、移り住んだ所の舊營である。古喇勒古は今の巴爾喀嶺で喀喇主嚕堅はその中の小山の名、闊々納兀兒は青い湖で草地の中に在るものと思ふ。此初度の即位は源流には「特穆津年二十八歳次已酉于克魯偏河北郊、即汗位、稱索多博克達青吉斯汗」とあつて、南宋孝宗末年、西紀一八九九年にあたる。第二回の即位はこれより十七年後の寧宗開禧二年丙寅、西紀一二〇六年で、此時は幹難河の源で位に即いて居る。

(8) 第二段第六節 四句。

成功する前に相會へる汝の孛兒帖徹辰哈屯。

Bogayu-chagan の幸福なる汝の土地人民。

Boghordschi no Munchih の二人の忠實なる友。

凡てに完全なる國家組織。——凡てに彼所に在り。

第二句の「ボルガトハガン」云々は不明。何か佛に關係するものでないかとも思へどしかと分らず。漢譯には「有福之布爾噶圖汗遊牧所」とし、

シユミットも「ボルガトハン、汝の幸福なる土地と多數の人民」として曖昧にして居る。孛兒帖哈屯は、即ち翁吉刺の德薛禪の女で、初め可汗の父也速孩が、その子の爲に許嫁とし、其歸途殺されてより、特穆津は辛苦をなめ、後漸く之を娶る事が出来たのである。秘史には此所の事を記して、『それより帖木真別勒古台二人は、德薛禪の女孛兒帖兀真を(帖木真)九歳なる時見て來たるにより別れて居りしを、客嚕噠木噠に沿ひ尋ね行けり。扯克徹兒、亦忽兒忽二山の間に、德薛禪翁吉刺はそこに居たりき。德薛禪は、帖木真を見て、甚しく大喜して言はく、泰赤兀惕なる汝の兄弟嫉めりと知りて甚く憂へて絶望せり。やつと見たるぞ汝を。と云ひて孛兒帖兀真を配せて送れり』と云つて居る。その兀真を配つた年は、秘史では明かでないが、源流によれば戊戌年(11)で、宋孝宗淳熙五年西紀一一七八年と見えて居る。此時帖木真是年十

七で、孛兒帖夫人は十三歳とあるが之は祕史に初め許嫁とした所に孛兒帖の方が「帖木真より一歳大きく」と記して居るので、何れが眞であるか定め難い。然し何れにせよ、蒙古の早婚の風はこれでも分ると思ふ。此孛兒帖は所謂糟糖の妻であつて、中々賢名な女で、成吉思汗の數多き后妃（ドーン）の蒙古史には五百人と記して居るが、之は洪鈎が云ふように五十人とみるがよいと思ふ。⁽¹²⁾尤も元史の表には三十九人を數へて居る。この事は尙後に述べる）の中の正后で、然も正后五人の首位にある婦人であり、且求赤、察合台、斡歌台、拖雷の母である事は、何人も知つて居る所である。

次に Boghoridschi 及び Munchuli とは、即ち孛斡兒

出と木哈黎である。孛斡兒出は、阿嚕喇惕氏の人帖木真が若くして八匹の馬を盗まれたのを遂つて取り返しに行つた時に初めて知つた人で、その働

きによつて馬を取り返す事を得、これより莫逆の友として、又忠實なる臣として仕へた人である。

祕史によれば、功臣の第二位に在り、又四傑の一人として其功績は非常なものである。木哈黎は、

札刺亦兒氏の人、同じく成吉思汗に仕へて、功臣の第三位にあり、四傑の一人として働き、後國王

に封せられ、成吉思汗西征の前には命を受けて滿洲の經略をなし、その方面を蒙古の手に收めたの

は全く此人の力である。兩人共、成吉思汗の信任厚く、祕史卷八に太祖の勅を記して「孛斡兒出、

木哈黎二人は我が善き事をば扱きて、善からぬ事は立つ迄止めて此位に到らせたり、今衆の上に位

して九度の罪にな罪なひそ。孛斡兒出は右手の阿勒台山に倚れる萬戸を知れ、木哈黎國王は左手の

合喇溫只敦に倚れる萬戸を知れ」と云つて居り、元史の孛斡兒出傳には之によつたのであるか『從

容謂博爾求及木華黎曰。今國內平定。多汝等之力。

我之與汝。猶車之有轅。身之有臂。汝等宜體此勿替。遂以博爾求及木華黎爲左右萬戶。各以其屬翊衛。位在諸將上。』として居る。其高位功臣としし重きをなした事を知るに足る。木哈黎は太祖十八年三月に死し、李幹兒出は太祖の西征に従ひて歸りて後間もなく死んだようである。四傑の中最後迄生き残つたのは此人である。因みに四傑は四駿ともいはれ、李幹兒出、木哈黎、李囉忽勒、及赤老温を云ひ、所謂四狗（忽必來、者勒蔑、者別速格台）兩先鋒（主兒扯歹忽、亦勤答兒）と共に成吉思汗の十功臣といはれたものである。

(9) 第二段第七節 四句。

神變によりて相會へる汝の妻なる Chulan chaton (哈屯)。

汝の琵琶笛及その他の樂器。

汝の俊美なる二人の *bin bighan* 夫人。

汝の珍品を集めし金の宮居——凡て彼所に在り。

此第一句の神變によつて會へる云々は分らず、源流にも神變らしき事も記されず、そのままにしてをく。然しこの Chulan chaton は即ち忽蘭哈屯、源流の和蘭郭幹で、正后五人の第二位にあり、果魯干を生みし人、成吉思汗之を愛する事正室李兒帖の生子の如しと洪鈞は云つて居るのをみても太祖に寵愛された事が分る。此哈屯は蔑兒乞部の女で源流には次の如く記して居る。『壬子年（帖木真）三十一歲。出兵烏訥根江東地方。因江水漲發。上即在江邊屯駐。遣使諭令納貢。如不納貢則征之。高麗察罕汗懼。進獻高麗墨爾格特岱爾烏遜之女和蘭郭幹云々』此に高麗とあるが之は朝鮮に在つたところの王氏高麗でなく北方の一部族を云つたものであらう。ドリンンの蒙古史によれば、乃蠻太陽汗の死後其子古出魯克は叔父不亦魯黑汗の許に身を寄せ、又蔑兒乞部長塔克塔も此汗の保護を仰ぎしが、成吉思汗は此等の汗を征する事となり、

次で蔑兒乞部をも征伐して其一族の忽蘭哈屯を收むるに至つたのである。祕史にも此事實見元成吉思汗の大に喜べる事を知る。此年次はドーンンは一二〇四年春乃蠻を征し、次で蔑兒乞部を征したように記して居る故に祕史に鼠の年秋として居るのは之を指すのであらう。⁽¹⁶⁾而して一二〇四年は甲子年で、源流に云ふ如く壬子ではない、源流の年次は得て誤り多く信じ難いので、今はドーンンにより甲子に従つて、源流の壬子は一まはり前にあつたものと思ふのである。

次の Jisur, Jisgen の二哈屯は同じく成吉思汗の正后の中の二人である。此二人は姉妹で塔々兒部の女である。源流に『癸丑(帖木真)三十二歳。聘塔々兒部伊克綽囉之女濟蘇哈屯、濟蘇凱哈屯姉妹二人爲妃云々』とあるによつて分る。然し祕史には之を狗年とし四部塔々兒を征伐し初め也速干合屯を得、後に其姉なる也遂を手に入れたと記して居

るのは同事件を云つたものと思ふ。所で之に付いて那珂博士は祕史の説を取つて狗年を一二〇二年壬戌として居られる之には尙考證を要するが、今暫く此説による事にする。⁽¹⁷⁾然らば此二人の哈屯は一二〇二年に成吉思汗の所有となつたのである。⁽¹⁸⁾元史譯文證補はドーンンによつて第三夫人を也速凱特、第五夫人を也速命とし、也速凱特の妹として居る。そして洪鈞は之に注して「祕史により也速凱特は也遂也速命を也速干に比定して居る」のは當を得たものと思ふ。

因みにドーンンによれば正后五人あつてその中の四人迄はこれ迄に出て來たが、残る一人は第四后の公主哈屯である。河勒壇汗の女であつて金の衛紹王の公主と云はれて居る、ドーンンは之を Gueukdion とし支那語の公主の轉じて名となつたものと云つて居る。⁽¹⁹⁾ドーンンは右の如く正后五人として居るが、元史の後妃表には四幹兒朶に四

人の主なる哈屯ををき后妃の數も前云ふ如く三十人となつて居て一致しない。然し幹兒朶の事や實際の事から推測して、此后妃に付ては、元史の方が信ずるに足ると思ふ。加ふるに元史表には、公主哈屯の名は見えず、之は別にしてもよいと思ふ。若し然らば、正后は四人となり、孛兒帖哈屯は第一位として大幹兒朶に住し、忽蘭哈屯は第二位として第二幹兒朶に、濟蘇(也遂、也速)は第三、濟蘇凱(也速干)は第四として、夫々第三第四幹兒朶に居たのであつて、元史の記事の如くなり得る。尤も忽蘭哈屯と後の二人の哈屯は來歸の年次から云へば、反對になるようであるが、その關係よく分らぬので、暫く通説のまゝにして置く。

(10) 第二段第八節 四句。

Charguna-chan の地が暖しう。

汝に征服されし唐古特が多しう。

又 Kurbelshin chatum が美しう。

汝は汝の凡ての蒙古人を眞に棄て去りしや。

此第二句は漢文獨文の譯によつたのであつて、蒙古文の原文では、『又外の國なる唐古特を得たりとて』といふ如き意味に、解せられるのであるが、何れが是なるかはつきりしない。唯何れにせよ、意味に於ては甚しい差異はないと思はれる。

Charguna-chan の土地はよく分らぬ。唐古特方面の一山を指したものとと思へど、比定するものを見出し得ない、が一體、この一節は、成吉思汗が唐古特征伐に行つて、此地方に長く滞在し、遂に病を得て死するに至つた事を、幾分か悪く云つたようにも思はれる點もあるので、恐く成吉思汗が滞在した所の地方を、指したものと思はれる。元史、太祖二十二年五月閏避暑六盤山……とある事からすれば、多分此方面の暑氣はげしくない地方を、云つたものであらうか。

Kurbelshin chatum は、即ち唐古特の錫都爾

固汗の妻女たる評判の美人であつて、之に關しては源流に一場の面白い劇的な記録をのせて居る。⁽²⁰⁾即ち初め成吉思汗の雷名が遠近に聞ゆるや、唐古特の汗も畏れて股従を乞ふたので、使をやつた所、その使者と唐古特人とが、此哈屯の美に付いて話し合つたのである。その文句に「古爾伯勒津幹哈屯面色光瑩夜不須燭。」とか「面色美麗明並日月」とか見えて居る。後に唐古特を征伐した時、錫都爾固汗と成吉思汗とが、互に三變して、遂に錫都爾固汗が敗けて捕へられ、同時に此哈屯と一般民衆を得た事を記した後、次の如く云つて居る『又欲在彼阿勒台汗山之陽。哈喇江岸邊過夏。其古爾伯勒津幹哈屯甚美麗。衆多奇異之。古爾伯爾津哈屯云。從前我之顏色尙勝於此。今爲爾兵烟塵所蒙顏色頓減。若於收水沐浴可復從前之美麗。於是令其沐浴。古爾伯勒津哈屯前往哈喇江岸邊沐浴(中略)出浴而回。顏色果爲增勝。是夜就

寢。汗體受傷。因致不爽。古爾伯勒津哈屯乘便逃去。投哈喇江而死。從此稱爲哈屯額克江云々』此記事がどれ迄信用出来るか疑あるにせよ、此女が美しかつた事は、事實であらう。所で問題は、「是夜就寢、汗體受傷、因致不爽」の一句である。之はシユミットの云ふ如く、⁽²¹⁾成吉思汗の死に付いて、病死と云はぬ唯一の記事であつて、若し此通であつて、此婦人によつて報復されたとするならば、甚だ興味ある事と考へられる。然し之に付いては、シユミットも斷言はせず、又彼を待つ迄もなく斷言は出来ぬ。然しながら源流の作者としてその祖宗の事蹟の悪い事を隱す氣があるならば、かゝる事は記さぬだらうと思はれるに、かく明白に云ひ傳へて居るのをみると、一概に誤りだと排斥する事も出来まい。私自身も全然信用する譯でもなく又排斥するでもないが、ともかく尙一層研究すべきものと思ふのである。又此哈喇江は黃

河の上流と云はれて居る。唐古特はよく知られて居るから此には別に述べぬ。

(11) 第二段第九節 四句

たさへ、我々は汝の貴き命に楯となつて仕へる事は出来ないうにせよ。

我々は尙寶玉の如き汝の靈を故郷に送り。

以て汝の夫人なる孛兒帖徹辰に示し。

又以て汝の凡ての國民の希望を満足せしめん。

此一節が全體の末句であつて、色々述べてその功をたたへ、其死を悼んだ末に、今更何とて仕方ないから、その靈柩を故地に送りて祀り、夫人及國民に告げ、以て共に仰ぎ祀らうといふ事を歌つて結んだ譯である。

此第一句は原文の意味は不明なので、シユミツトの譯文によつて記した。シユミツトが何によつて、かかる譯を附したかは分らぬが、面白い言葉を使つたものである。漢譯には「今萬金之軀雖不

能保」として居る、之は通例な云ひ方で、シユミツトの譯の裏を云つたものである。

可汗の死に付いては異説がある。

元史本紀 二十二年丁亥五月間。避暑六盤山。

七月壬午不豫。己丑崩于薩里川哈老徒之行宮。

蒙古源流 丁亥七月十二日。歿於圖爾墨格依城享年六十

六歲。

六盤山は、甘肅省の平涼府附近の山であり、圖爾墨格依城は秘史の朶兒蔑該で、靈州をいふ六盤山に近い所である。又薩里川といふのは、薩阿里客額兒で、ケルレン川の上流の地で太祖の舊營のあつた所、哈老徒は海子(泊乃ち湖池)の名でその近くにあつたものと云はれる。尙七月十二日は、元史の七月己丑にあたるといふ。此兩者の記事は少しく異り何れが正しきか分らぬが、那珂博士が秘史の注に考證して居られるのは恐く當を得たもので、思ふに太祖は實際には靈州で死んだが、そ

の靈を移して喪を發したのは、舊營の薩里川であるときみて差支ないであらう。

尙太祖を葬つた地は起磬谷とあるが、源流には長陵を作り白屋八間を立つ」としその所在地を「在阿勒坦山陰哈岱山陽之大謬特克地方」として居るので、大體の見當はつくと思ふ。シュミットは之を解して阿勒泰汗(山)の陰と肯特依汗(山)の陽との間の也客兀帖克の地として居る。那珂博士は肯特依汗は肯特山なればこの阿勒泰山は肯特山より分れてケルレン川の源を挾める一峯の名なるべし、思ふに起磬谷はケルレン川の源、肯特山の陽にありて撒阿里原の幹兒朶より遠からざるべし」と云はれて居る。或は然らんと思ふのである。

又穆納の地と源流に見えるのも此近くの地名であらう。

以上極めて概略の事を歌と共に述べて來たが、

解説としては固より十分でない、又歌そのものも

十分に研究したわけがなく、唯思ひつきを述べたまま、誤譯もあると思ふが、それは將來の研究によつて改めたいと思ふ。又解説の方も、今は解説を主としたのでないので、不十分であり、そして一般に知られて居る事は、説明が冗漫になるので略してしまつた事は、寛恕されたいと祈る次第である。それはとにかく、右の歌は挽歌として面白いものであつて、又内容からしても注意すべき點もないではなく、研究の價値は十分に有ると考へる。その意味からして敢て之を記して、貴重な紙面を汚した次第である。(大正十四年九月五日)

註。

1、成吉思汗實錄序論七〇—七四頁。

2、第一段第一節の各句は皆 *Mim* (私の、人稱代名詞第一人稱所有格) で終つて居る。之も脚韻をふむものとみてよい。又第二節も第三句を除いて他の三つの句も同様に *Mim* で終つて居るが同じく韻をふむものと云へようか。

3、漢譯蒙古源流卷四、七枚—八枚、他の本にてはその對應する所を參照されたし。

4、成吉思汗實錄 三二四頁、蒙古源流 卷四、八枚その他。

5、蒙古源流の漢譯には、九烏爾魯克衆官員等とあり。

6、漢譯では遊牧之……とあるが屬文は「生れたる」となつて居る。

7、成吉思汗實錄 三二四頁。

8、同 一一四—一二六頁。

9、卷三、十一枚。

10、成吉思汗實錄 七二—七三頁。

11、蒙古源流卷三、十枚。

12、D'Olsson, Histoire des Mongols, Tom. I, pp. 410—419

元史譯文證補卷一下、附太祖后妃皇子公主考異ノ注。

13、成吉思汗實錄 三三九—三四一頁、大要をさる。

14、12證補ノ條參照。

15、蒙古源流卷三、十四—十五。

16、成吉思汗實錄 二九三—二九六。ドイソン一卷、八五—九〇頁。

17、蒙古源流卷三、十九枚。實錄 一七九—一八〇、一七四注

もし之によれば成吉思汗のその時の年齢もちがつて來る事

は申す迄もない。

18、12と同じ。

19、12と同じ。

20、蒙古源流卷三、二十。卷四、四—五枚。

21、シユミット譯注本、三八八頁。注第五十八條。

22、成吉思汗實錄 五七七—五八二頁。

23、22と同じ。シユミット 三八九頁。源流卷四、九枚。

因みにシユミットを記して來たのは、蒙古源流の譯注本である。

Geschichte der Ost. Mongolen und ihres Fürstenthums,
verfasst von Sanang sechen Chingfatschi der Orlos;
1829. St. Petersburg.